

岸田劉生と東洋の美

今年洋画家、岸田劉生（きしだ・りゅうせい/1891～1929）が38歳の若さで亡くなってから、ちょうど90年を迎える年となります。生前から毀譽褒貶の定まらない画家でしたが、没後40年を過ぎた1971（昭和46）年に二点の作品が同時に重要文化財に指定され、没後50年の年に東京と京都、二つの国立美術館で大規模な回顧展が開催されて、日本の近代美術史における優れて高い評価は不動のものになったと言えるでしょう。その後も生涯と芸術の詳細にわたる研究と展覧会が重ねられてきました。

岸田は20年間ほどの画業のうちに、自身の表現を次々と変化させ、一つの作風に停滞することがありませんでした。穏やかな風景の描写から出発して、当時最先端だった西洋の表現主義的な傾向に同調した後、今度は時代に背くかのように北欧の古典的な細密描写に接近してゆきました。その写実表現を突きつめてゆく中で、岸田は独自の緊張感と精神性をたたえた画面を生み出します。重要文化財となっている作品の一つ、《道路と土手と堀（通写生）》（1916年/東京国立近代美術館蔵）や、同時期の一連の肖像画、静物画などです。

やがて、長女の麗子が数え年の5歳になった1918（大正7）年から、その麗子をモデルとした制作が主となってゆきます。同時にこの頃から東洋の古美術や古典芸能への関心が高まり、表現にもまた変化が現れます。



《支那服を着た妹照子像》 1921（大正10）年 ひろしま美術館蔵

岸田の美意識の移行は、この「麗子像」の変容からよく伝わりまます。東洋の美に目覚めた岸田は、「写実以上の処」を求めようになり、「或る処で写実を欠如させ、その欠如を写実以上の深い美によって埋めればいいのである」と述べます。その実践が、神秘的でミステリアスな雰囲気をもった麗子の肖像の制作でした。

また岸田は1920（大正9）年頃から、

実際に日本画を描くことも始め、その作品を展覧会で発表するようにもなります。岸田の日本画には、中国宋元時代の絵画に倣った繊細な描写のもの、おらかな筆致で詩書画が一体となって表現される文人画風のものがあります。それぞれに岸田の個性が発揮されていて、晩年は、こうした日本画を描くことの方が主となってゆきました。少ない油彩画の制作においても、そこに東洋の美の表現をなすべく格闘していた姿がうかがえます。

最晩年の岸田は、ヨーロッパにおもむいて自分の築いた表現を問うことを決意していましたが、それはかなうことなく、資金調達のために渡った中国での制作からの帰路、山口県徳山で病によって道半ばの生涯を閉じました。

この岸田の芸術を、「写実から、写意へ」の変遷と捉えて振り返る展覧会を、今年から来年にかけて、当館を含む全国四つの美術館で開催します。

（学芸員 三谷 渉）



《菊慈童》 1926（大正15）年 笠間日動美術館蔵

INFORMATION

岸田劉生展 ～写実から、写意へ～

会場/田辺市立美術館（展示室1～5）
会期/2020年2月1日（土）～3月22日（日）
観覧料/600円（480円）
学生及び18歳未満の方は無料
※（ ）内は20名様以上の団体割引料金です。
開館時間/午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日/毎週月曜日（ただし2月24日は開館）
2月12日（水）・2月25日（火）

REPORT 「現代の織Ⅳ 草間喆雄」展 アーティストトーク



当館は、現代的な織の造形を展開している日本の代表的な作家をシリーズで紹介してゆく特別展、「現代の織」を一昨年から主催しています。その4回目となる、草間喆雄（1946～ ）の制作を特集する展覧会を、今年の4月から6月にかけて、熊野古道なかへち美術館で開催しました。1970年代の初めからアメリカに渡って、織の立体的な造形に取り組んできた草間の、1990年代から最新の作品まで17点を一同に展覧する内容でした。

会期中に二回のアーティストトークを催して、作家自身から作品や創作についての話をうかがう機会をもちました。アメリカ留学時代からの初期の作品や、建築と一体になった作品の制作など、今回の展覧会で伝えきれなかった部分について、最初に別室で写真を投影して説明が行われ、その後展示室に移って、1点ずつ参加者とともに見てゆきました。

用いられている技法や素材、作品の構造などとともに、表現の着想からならいとしたことなどについても直接話を聞くことができ、大勢の参加いただいた方々とともに、たいへん有意義な時間を持つことができました。

（学芸員 三谷 渉）

近年の作品について説明する草間喆雄さん

廣島鋤花（鋤和）の日本画

当館では、近代に紀南地方の出身者で画家として活動した人物の軌跡を確認し、当時の当地の美術の動向と日本の近代美術史との関係を位置づけて紹介する展覧会シリーズ、「近代紀南の画家」を昨年度から開始しています。初回は日本画と洋画、双方の領域にまたがって活動した楠本秀男（1888～1961）について振り返りました。

今年度は、1890（明治23）年に現在の田辺市栄町に生まれ、1981（昭和56）年に91歳で亡くなるまで、日本画と生け花の創作を精力的に行い、当地の文化活動の発展を支えた、廣島鋤花（本名は幾太郎、1955年から鋤和に改号）を取り上げます。

鋤花は、幼少の頃から華道を教授していた父、廣島義甫（本名は岩吉）に花と絵の指導を受け、後に大阪の北野恒富、京都の西山翠嶂に師事して日本画を学びました。特に翠嶂のもとでは、1921（大正10）年の画塾「青甲社」の創立にも参加し、およそ15年間に亘って研鑽を積んでいます。

鋤花は、1927（昭和2）年から1929（昭和4）年にかけて、和歌山の各地を写生してまわり、そのスケッチをもとに《紀南百景》を制作しました。1929（昭和4）年の昭和天皇和歌山行幸の折には、そのうちの二十五景が一冊の画帖にまとめられて献上されています。また、1931（昭和6）年の青甲社展に《紀南百景》を出品した際には、特別に一室がその展示にあてられるなど、この作品は鋤花の画業を代表するもの一つとなっています。青甲社展に出品された《紀南百景》は、現在和歌山県立近代美術館に収蔵されています。そのうちから田辺、白浜を描いた3点の作品と現地の紹介を、今号の折込みに掲載しましたので、そちらもご参照ください。

華道家としても、鋤花は1917（大正6）年に亡くなった父を継承して師匠となり、1927（昭和2）年に独自の「盆景花」を創案して、広円流を発足させています。1930（昭和5）年には、和歌山写生旅行の際に感じた景色を取り入れた生け花を発表して、華道界に新風を吹きこみました。

1945（昭和20）年に帰郷してからは、広円流家元としての活動が主になりましたが、日本画の筆も取り続け、田辺市や白浜町の寺院への揮

毫も行って

います。1976（昭和51）年に開かれた米寿の記念展では、過去のスケッチを元にして新たに《紀南百景》を制作して発表するなど、最晩年まで意欲的な作画活動が続けられました。

鋤花は、日本画と生け花、双方の創作から自らの表現を高めていった作家ですが、今回の展覧会では、「鋤和」に改号する前、日本画家としての活動が盛んだった「鋤花」の時代の作品を主にして展覧します。同時代の画家たちとの交流などもうかがいながら、本展覧会を通じて、当地近代の美術活動の様相を探ることを深化させてゆきたいと思います。

（学芸員 知野 季里穂）



聖福寺（白浜町）の襖絵を描く晩年の廣島

INFORMATION

近代紀南の画家Ⅱ 廣島鋤花

会場/田辺市立美術館（展示室1・2）
会期/2019年12月7日（土）～2020年1月19日（日）
観覧料/260円（200円）
学生及び18歳未満の方は無料
（ ）内は20名様以上の団体割引料金です。
開館時間/午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日/毎週月曜日（ただし1月13日は開館）
12月28日～1月4日・1月14日
※展示室3・4・5では「原勝四郎と紀南の画家」を開催します

REPORT 「描かれた滝」展 世界遺産登録15周年記念コンサート

今年の7月から9月にかけて開催した「描かれた滝」展は、「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されて15周年を迎えることを記念した展覧会でした。会期中に、京都精華大学教授で作曲家の小松正史さんを招いてのコンサートを開催しました。

小松さんは、昨年の3月に図書館と共催した連続講座、「森と芸術」の「音楽」の部門の講師としてお越しいただいたことがきっかけで、当地の環境と音のフィールドワークを行い、その成果から「熊野古道組曲」を作曲して、CDアルバムをリリースしています。

閉館後の田辺市立美術館のエントランスホールを会場にし、「熊野古道組曲」の演奏をメインに、参加者とともに行う聴覚のトレーニング「耳トレ」や、これまでに作曲してきた環境音楽の演奏もしていただいて、たいへん充実した内容となりました。

当地で生まれた音楽を、その地で聴くというまたとない時間は、世界遺産登録15周年の記念にふさわしいものでした。

（学芸員 知野 季里穂）



フィールドワーク時の写真を投影しながら演奏する小松正史さん

観覧料の改定について

田辺市立美術館条例の改正、施行にともない、2019年10月1日から、館蔵品展の観覧料が下記のように変わります。ご理解をお願いいたします。

改定前:250円 → 改定後:260円

※20名様以上の団体割引料金、200円に変更はありません。18歳未満及び学生の方はこれまで通り無料です。

※小企画展の観覧料もこれに準じます。

廣島鋤花《紀南百景》の地を訪ねて

2019（令和元）年9月



田辺市稲成町に、ひき岩群と呼ばれる岩肌が露出した巨大な岩山群があります。その東側に、現在では土砂で埋まって、かつての面影はありませんが、轟音を立てて流れる溪流がありました。鋤花はその溪流越しに岩山群を写生したと思われる。（写真はため池越しに岩山を見たものです）



鋤花は高台にある平草原から白浜温泉街を見下ろして写生しています。ホテルや住宅が増えて、当時の景観から随分と変化していますが、奥に小さく見える、中央の海蝕洞が特徴的な円月島の姿は変わらず、現在も白浜町のシンボルとして親しまれています。



田辺市大塔村の鮎川沿いを、鋤花は山手に向かって写生しています。現在は休業していますが、黄金の湯として長年親しまれた、鮎川温泉の看板が道路の左手に見えます。新しい道路も作られて、温泉周囲の地形は変わってしまいましたが、遠くの山並みは鋤花が訪れたときと同じです。